慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	会話の中で「あれ」の役割を考える
Sub Title	On the function of "ARE" in everyday Japanese conversation
Author	畑山, 玲恵子(Hatayama, Reeko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.102, (2012. 6) ,p.132(175)- 148(159)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01020001-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

会話の中で「あれ」の役割を考える

畑山　玲恵子

1　問題意識

1.1　日常会話では、(1) のような「あれ」を用いた表現が現れる[(1)]（「あれ」を含む発話にはその下に実線を、「あれ」の指示内容を含む発話には波線を付した[(2)]）。

(1)【Bの母親は札幌に住んでいる】

1-1 A：卒業式の写メールあるの？　　うん

1-1 B：　　卒業式はー　あ でも一枚か二枚しか撮ってない

1-2 A：　　うん　　あーあーあーあ

1-2 B：なんかママの　<u>あれを借りてデジカメを借りて</u>　　だからデータも

1-3 A：　　行っちゃったんだ　　うーん

1-3 B：そのまま　札幌に　　行っちゃいましたので

仮に1-2 B～1-3 Bの発話から下線部を削除してみると、(1')のようになる。

(1') なんかママの　デジカメを借りて　だからデータもそのまま札幌に
　行っちゃいましたので

「あれを借りて」という発話がなくても文は成り立ち、Bの発話内容に変化はない。むしろ、(1') の方が、(1)1-2 B～1-3 Bの発話より整った文になっている。では、この「あれ」を用いた表現は必要のない、冗長な表現なのだろうか。

なお、このような表現はア系指示詞ならば、「あの人」「あの時」「あそこ」などでも同様の現象が見られると考えられるが、今回調査した範囲では「あれ」という語形の用例が多くを占めたため、今回は実質上「あれ」を中心とした分析となっている。

1.2　(1) のような表現を正面から扱う研究には、迫田 (1993)、上村 (1996)、Kenchu(1997)、藤谷 (2004)、久野かおる (2007) などがある。これらの先行研究では、(1) のような表現を「話し手の適切な言語表現の模索の表示として、その表現のすぐ前に「あれ」を仮に置いておき、その後に話し手の意図した表現を示す」(迫田1993)、「指示対象の事物名称を想起できない場合の代替形」・「後方照応的な用法。指示対象は名詞の他、動詞句、節も含みうる」(上村1996)、「時間稼ぎ」・「語彙の代用」(藤谷2004) など、適切な語が見つからず臨時に「あれ」を用いると述べるものが多い (迫田1993の用語では「仮置き型」)。

また、これらの先行研究では「あれ」の指示内容をわかっていながら、あえて明言を避けるために用いている例も同列に扱っている (迫田1993の用語でいえば「代用型」)。その場合、指示内容が話し手によって明らかにされることはないため、(1) のような表現とは分けて考える必要があるだろう。今回は (1) のような表現、すなわち迫田 (1993) の用語でいう「仮置き型」に限定して取り上げる。

1.3　前節であげたような会話分析的研究のほとんどが、(1) のような表現をこれまでの指示詞研究で指摘されてきたア系指示詞の「話し手と聞き手の共有知識・共通の経験を指す[(3)]」という制約から逸脱すると捉えている。しかし、(1) のような表現は本当に指示詞の用法では説明できないのだろうか。

一方、(1) のような表現が会話分析以外の文法的な指示詞の研究では取

り上げられてこなかったのは、指示詞の研究が主に文章や作例をもとに行われてきたことが関係しているのではないか。以上をふまえて、本稿では(1)のような表現について、

(2) a. 従来指摘されてきたア系指示詞の特性とどう関連づけられるのか
b. 書きことばとは異なる日常会話の特性を考慮すべきではないか

という問題意識に立ち、再考してみたい。

2 「あれ」を用いる表現の特徴

2.1 まず、(1)のような表現は本当に話し手と聞き手の共有知識ではないことを検証する。

(3)【後輩たちの演奏会に「あの代」の先輩が来ていなかったことについて。演奏会は春と冬の年二回あり、今回は春。「あの代」の先輩は今の後輩たちを直接は知らない。】

3-1 C：あんまいなかったなーと思って　冬っていたっけ　うん
3-1 D：　　あの代？

3-2 C：　　Eっち？
3-2 D：だから結局あれでしょ？　ふたりしかいなかったんでしょ？

3-3 C：　〔#〕誰？　あーそうだそうだ
3-3 D：Eさんと　〔#〕Fさん

話題となっている演奏会にはCもDも行き、それぞれEとFの二人を会場で見かけている。演奏会に「あの代」の先輩が「ふたりしかいなかった」ということはCとDにとって共通の経験であると言え、共有知識である以上問題なくア系指示詞が使えるように思える。ところが「あれでしょ？」の発話時点では、「あれ」が何を指すのかCは理解することができない。なぜ

なら、それまでの会話をふまえても3-2D「あれでしょ？」の発話時点では、Cの考えうる「あれ」の指示内容はいくつもあるからだ。たとえば、

(4) a. 春はみんな忙しいんでしょ？

b. あんまりいなかったんでしょ？

c. 代が重なってないと来づらいんでしょ？

d. 今の代の子が、もうわからないから来ないんでしょ？

など可能性はいろいろあり、どれが続いてもおかしくはない。「あれでしょ？」の発話時点では、その指示内容が「ふたりしかいなかったんでしょ？」だと確実に同定することはCにはできなかったと言える。そもそも、話し手自身によって「あれ」の指示内容を直後に明示しなければならないということは、話し手自身が、聞き手による同定を求めていないからだろう。**「あれ」を含む部分を発話した時点では、話し手は聞き手との共有知識かどうかは問題としていないと言える。**

2.2　この表現では、直後に話し手によって指示内容が明示されることが大きな特徴である。

(5)【Gが最近、映画の試写会に行ったという話をうけて】

5-1 G：映画ねー　　見たいけどねー　〔#〕あれ見たいトイストーリー

5-1 H：　　うん　　ねー

5-2 G：

5-2 H：トイストーリーねー

(6)【「二郎」はラーメン屋の名前、「鍋二郎」はその店のメニューのひとつ】

6-1 I：二郎うまいわ　　鍋二郎(…)なくなっちゃった　　ほんとほんと

6-1 J：　　うそー

6-1 K：　　二郎ーねー

6-2 I：　　いやいや(…)なんかよく

6-2 J：(どー)　　っあーもうあれかー不景気やから

6-2 K：　　そうなの

6-3 I：わかんないけど じろ 鍋二郎なくなった説が　　色んな後輩から聞く そう

6-3 J：

6-3 K：　　へー

(7)【ピザ(8種類味がある)を選んでいる。Lもバジルを選んだ】

7-1 L：　　いいよ　　どれでもいけるよ　　Lの選ぶのすごい

7-1 M：したら私もバジルにしようかな　　とります

7-1 N：

7-2 L：なんか　　あれなんだけど　マジョリティ(的)な感じなんだけど〔笑〕

7-2 M：　　〔笑〕

7-2 N：　　うん　　〔笑〕

7-3 L：こっちもあれだしこっちもそう〔笑〕

7-3 M：

7-3 N：　　私もバジルとも悩んだ

(8)【今日飲み会をするか相談をしており、Pが「(八月)一日」にしようと提案した】

8-1 O：どうしようかなーでも一日だとあれでしょ　次の日　月曜日でしょ

8-1 P：　　今日Qさんも来ないんですよねあ

8-2 O：　　あーそうなんだ

8-2 P：そうですよね あたしどっちにしろ明日仕事　　そうなんですよ

すでにあげた(1)(3)も含め、すべて直後に話し手によって指示対象が明示され、それがあってその後の会話が展開できていることがわかる。

2.3　話し手が直後に指示対象を明示するので、話し手は「あれ」の発話時点で指示内容をすでに明確に持っているようにみえる。しかし、次の(9)～(12)を見ると話し手は指示対象をスムーズに明示できずにいる。

(9)【R，Sは共に就職活動中で、このときはRの志望業界が話題になっている】

9-1 R：広告がちょっと興味あるけどーー番興味あるのは人材とか(かな)

9-1 S：　　あーなるほどー

9-2 R：んーだからあれリー　リクルートとか行きたいけどー

9-2 S：　　あー

(10)【Uが二人目の出産の際に、一人目の通園をどうするか相談した。10-1 T「ここ」は英会話教室をさす。】(3人の参加者。1人はこの部分では発話がない[(4)])

10-1 T：でもあれだよ　なんかあのーここにいる人たち(は)実家に帰るからってゆって

10-1 U：

10-2 T：休ませちゃって

10-2 U：　　(うーんうんうん)

(11)

11-1 V：ていうか先生さー俺ーーあれなんだよね　あのー40周年の　あのねー

11-1 W：　　うん

11-1 X：　　どれなんだよね？

11-2 V：写真を欲しいんだよ　俺は

11-2 W：

11-2 X：

(12)【Zの書いた本のテーマについて話している】

12-1 Y：だけどーあ　あれだろ　あのー〔#〕その何　Zのは何　巡礼の旅とか

12-1 Z：

12-2 Y：なんとかそういうの　信仰の旅とかそういうのなの

12-2 Z：　　しー　　しー　そうですね

(9) では言い直しが、(10) ～ (12) は「あーの」「あのー」「あのねー」というフィラーが現れる。「あのー」というフィラーは、

(13) a.「あの (ー)」は、話し手が言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作をおこなっている際に用いられる。この心的操作とは具体的には、名前の検索と、適切な表現の検討に二分される。

b. 名前の検索：モノ自体はわかっているが、モノの名前が思い出せないという場合の心的操作 (話し手がこの心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一旦遮断する宣言として働く)

c. 適切な表現の検討：言いたいコト (すでに漠然とは定まっている) に適した言い方を心的バッファで編集するという操作 (話し手が聞き手とのインターフェイスを遮断するというよりも、むしろ継続・保持しようとしている宣言として働く)

（定延・田窪 1995）

という機能を持つとされる。明示化の際に言語化に手間取るということは、その前の「あれ」の発話時点では当然言語化はできていないことになる。フィラーが出現すると言っても「モノ自体の検索」を行う際に現れやすいとされる「ええと」(5) はこの場合、調査した範囲では見られなかった。つまり、**「あれ」の発話時点では、話し手はモノ、または漠然とした言いたいコトは浮かんでいるものの言語化はできていない**と言える。

2.4　「あれ」という語形は本来モノや概念など名詞形を指す形だが、(1)のような表現の場合、モノ以外も指示内容となりうる。

(14) (3人の参加者。1人はこの部分では発話がない)

14-1 a：でもあれじゃない？そこで住んでいる人たちはきっと一生まれてっ　た頃＝

14-1 b：

14-2 a：からそういうの行われてるから当たり前と思ってるんじゃない？

14-2 b：　　うーん

(15)【cは幼い頃、将来は大工として祖母の家を建てると約束したが、現在は教師を目指している】(6人の参加者。2人はこの部分では発話がない)

15-1 c：ちょっと待って待って待って いやでも昔の話なんで

15-1 d：　　ちょ　dも昔の話だけどね

15-1 e：

15-1 f：

15-2 c：

15-2 d：

15-2 e：あーそうやってみんなあれだ　プロミスを忘れていくんだ　　んー

15-2 f：　　時が経てばね

(15)では「あれ」＝「プロミスを忘れていく」と述語部分までが「あれ」の指示内容に含まれる。「あれ」につづく表現は、(3)「でしょ？」、(6)「かー」、(7)「なんだけど」、(10)「だよ」、(11)「なんだよね」、(12)「だろ」、(14)「じゃない？」、(15)「だ」などモダリティ表現が多い。これらの表現は多くの場合、指示内容の明示部分でも再度示される。今回調査した範囲では、**「あれ」は命題部分までをカバーできるものとして使われている**ことがわかる。

3 発信者 (話し手) の問題

3.1 (1) のような表現で「あれ」と発話するとき、話し手は一体何をしているのだろうか。

金水 (1999) は、ア系指示詞に「記憶指示用法」があるとする。

(16) a. 過去の記憶中の場面は、回想によって焦点化された時点でアの領域となる。記憶指示用法は、この回想された場面と関連づけられた対象を値とする。場面は特定の時間・場面である場合もあるし、不特定である場合もあるが、ア系列の場合は、必ず話し手が直接体験した場面でなければならない。

b. 一般に、アの文脈照応用法と呼ばれるものは、すべてこの記憶指示用法である。先行文脈によって喚起された場面に、指示対象が存在することが示されているのである。一見、先行文脈に依存した表現のように見えるが、言語文脈は聞き手の便利のためにアによって焦点化される場面を限定しているに過ぎない (金水 1999)

たとえば、(1) のＢは卒業式の写真は母親のデジカメを借りて撮っていたことを回想しているし、(9)「リクルート」は当時Ｒが志望していた企業名なのでＲの記憶の中にあるだろう。名詞以外でも (10) でＴは「英会話教室の人たちの二人目出産のときの様子」を回想しており、「あれ」の指示内容は話し手の直接経験の記憶中にあるといえる。

ただし、必ずしも「記憶」とは言えない例も散見される。

(17)【ｉは転勤で福岡にいるｇとｈの共通の知人。ｈは就職活動中で、この日〇〇という企業のセミナーに行ってきた】

17-1 g：ｉさんと近いかなー　　博多か〔笑〕　うーんそっか

17-1 h：　　は博多？　　福岡？　なんかそっちの方らしい

17-2 g：あれだなー転勤やだなーー　　うーん

17-2 h：〔咳〕　　んまーでもまー　〇〇だったら大きいからね

(18) (3人の参加者。1人はこの部分では発話がない)

18-1 j：結局みんなあれなの？院生の子たちは行先は　　大体はめどついてんの？

18-1 k：　　うん

18-2 j：　　先生？

18-2 k：あ　lも受かったらしいよ　　うん

17-2 h「あれ」の指示内容は「転勤は嫌だ」である。まだ就職していないhに転勤の経験はない。従ってこの発話はhの記憶ではなく「iが転勤で福岡にいる」という直前の話題によって焦点化されたhの心の内の動きを指示していると言える。18-1 j「あれ」の指示内容は「院生たちは就職先が大体決まっている」である。この命題は「なの？」と共起していて、jはその命題について知らないことがわかる。

堀口 (1978) は、記憶に限定せず、「当人が観念の中に浮かべている事物を対象として言うもの」を「観念対象指示」としている。つまり、記憶に限らず、話し手の心内で想起されているコト・モノであれば、ア系指示詞で指示が可能なのだから、話し手が「あれ」を用いた時点では、(1) のような表現は、ア系指示詞「記憶指示」や「観念対象指示」の範囲内で説明ができることとなる。

3. 2　とはいうものの、聞き手がいる場面で、共有知識でないものをア系指示詞で指すことは、語用論的制約に反する。

しかし、「独り言など、聞き手の影響が文脈的に排除されている」場合には用いることができるとされているし (金水・田窪 1990)、堀口 (1978) も「観念対象指示」は「自己の観念に存在する事物を他に明示することなく指示するもの」であり、主に独り言や独白で用いられるとしている。

(1') では「あれを借りて」を削除し、「あれを借りて」と「デジカメを借りて」が内容的には同等であることを確認した。ただし、前者は「話し手自身にしかわからない形」、後者は「聞き手にも伝わる形」という違いがある。今度は「デジカメを借りて」を削除してみると、

(1") ママのあれを借りて撮ったからデータもそのまま札幌に行っちゃったんだよな

というような独り言であれば、本人はデジカメを思い浮かべているので、ア系指示詞の使用はまったく問題がない。

このように、(1) のような表現の場合も「あれ」の発話時点では話し手の中で一時的に聞き手の存在が排除されていると考えることで従来指摘されてきた「あれ」の特徴と整合的に解釈することができるのである。

3. 3　しかし会話を進めるには聞き手の存在を無視し続けることはできない。次の例では、

(19)【外国人野球選手の活躍をニュースで見て。「ラミレス」、「ペタジーニ」も外国人野球選手である。】(3人の参加者。1人はこの部分では発話がない)

19-1 m：あの人どこいった？　　ほらあの　ラミレスじゃなくて

19-1 n：　　〔#〕だれ？

19-1 m：奥さん友達のお母さんの人

19-1 n：　　ペタジーニ？

19-1 m「あの人」は、mの記憶中の「友達の母親を妻にした外国人野球選手」という具体的な人物を指示している。しかし、これまでの例と違って話し手によって指示内容が明示されない。「あの人」＝「ペタジーニ」という名前を最後まで思い出せなかったためである。その後、聞き手nは19-1 n「だれ？」というように、明示を促している。「あれ」を含む表現だけでは、聞き手には伝わらず、会話が先へ進まないのである。つまり、独り言

とは異なり、聞き手の存在する会話にあっては、指示内容を明らかにする部分が必須であるといえる。

3.4　指示内容を明らかにする部分が必須であることと、話し手が後方文脈で指示内容を明示することを意図して「あれ」を発話することとは同じではない。後方文脈照応を意図している場合、「あれ」の発話時点で話し手は指示内容を明確にもっていなければならないはずだが、実際は2.3のように、話し手は「あれ」の発話時点では指示内容を言語化できていない。話し手自身は後方文脈を指示するつもりで「あれ」を発話しているのではなく、**「あれ」を含む部分とその直後の指示内容を含む部分とは、「指示と被指示の関係ではない」**のである。

一見後方文脈で指示内容を表しているように見える発話は、指示内容を明らかにするという意図ではなく、「あれ」を含む表現が話し手にしかわからない、聞き手を無視した形になっているので、聞き手に伝えるために、**聞き手に分かるように言い直したもの**だと言える。指示内容を明らかにすることだけが目的ならば、「あれ」の部分にあたることばだけを発話すれば済むことであるにもかかわらず、「あれ」につづく表現が、指示内容の明示部分で再度示される場合が多いのも、話し手が指示内容を明示するのではなく「あれ」を含む発話全体を言い直し、先の「あれ」を含む発話を聞き手にわかる表現に塗り替えようとするからである。

3.5　従って話し手がこの「あれ」を使用することについては、語の臨時的な代替形や「時間稼ぎ」などのフィラー的役割という「あれ」の新しい用法や機能を考える必要はない。むしろ、フィラーの使用の際と「あれ」の発話の際では、話し手の操作は違うといえる。(1”) で「あれ」表現は、独り言であれば内容はかわらないことをみたが、その部分をフィラーに置き換えると、意味が通じなくなってしまう。

(1’”) ?? ママのあの一撮ったからデータもそのまま札幌に行っちゃったんだよな

それ以前に、フィラー「あの(ー)」は (13a)「聞き手の存在を予定」して

いるのであって、独り言の文脈では使用できないはずである。

「あれ」を含む表現は、いわば「走り書きのメモ」のようなものだといえる。メモは基本的に自分のために取るものなので、自分さえわかればどのような書き方をしてもかまわない。しかし、それを人に渡すときには、相手にわかるように書いていなければ伝わらない。つまり、「あれ」の指示内容を含む発話は、「人に渡すために、相手に分かるように書きなおしたメモ」といえる。

4　聞き手 (受信者) の問題

聞き手の立場から考えると、(1) のような表現は後方文脈照応のようにみえる。

実際は、「あれ」を含む発話と、「あれ」の指示内容を明示する発話は内容的には同等であり、内容理解の上ではどちらか一方で充分である。時間的に推敲が可能な書きことばであれば、(1') のように「あれ」を含む発話は削除されてしまうだろう。

しかし、日常会話の場合、発話と受信は同時に行われる。発話したことばはその瞬間に聞き手に受信されるため、一度発話したものを時を戻して取り消すことはできない。

話し手が言い直すと、聞き手は「あれ」を含む発話を受信した直後に、その指示内容を含む発話を聞くことになるので、結果として後方文脈照応のようにみえるのである。

さらに、後方文脈照応にみえることによって、二次的な効果がうまれる。「あれ」のあとに、その指示内容が明示されると思っている聞き手は、「あれ」の発話から「話し手がこれから自分の考えていることを言おうとしている」、「話し手はモノやコトは浮かんでいるが、言語化できていない」という話し手の状況まで読みとってしまうのである。その結果、「あれ」の直後の発話に注意を払ったり、話し手が「あれ」の指示内容を含めてもう一度言い直すまで待ったりする。たとえば、

(20)【oとpが共通の知人qの結婚について話している。▽△はqの相手の勤め先。】

20-1 o：qさんあれでしょ〔#〕あの▽△の人でしょ

20-1 p：　　そう▽△

では、20-1 o「あれでしょ」のあとに、息継ぎ以上の間がある。話し手と聞き手の役割が固定されていない場合、無言の時間は次にだれが話し手になってもかまわないというシグナルになる[6]。にもかかわらず、pはoが「あの▽△の人でしょ」と言い直すまで発話せずに待っている。

これは、話し手の意図とは関係なく、あくまで聞き手側の受け取り方とそれに基づく聞き手の行動である。しかし、聞き手の立場で読みとれることをそのまま話し手の意図とよみかえてしまうと、まるで話し手側も聞き手の「注意喚起」のため、言語化するための「時間稼ぎ」のために、意図を持って「あれ」と発話しているようにみえる。しかし、**後方文脈照応は聞き手側からみた結果であり、「注意喚起」や「時間稼ぎ」というのは、そこから生じる効果にすぎない。**結果的にそれらの機能があるとはいえても、話し手が「あれ」と発話するのは、それを目的としているわけではない。うらをかえせば、聞き手の受け取り方に話し手の意図はかならずしも関係ないということである。

5　話し手の操作と聞き手の作業のずれ――まとめにかえて

(1)のような表現のときの話し手の操作は「モノやコトは思い浮かべられるものの言語化が追いつかないため、一時的に聞き手の存在を排除し、話し手自身の記憶や観念内のモノやコトを指すが、それでは聞き手に伝わらないので、その後聞き手に伝わる言い方で言い直す」というものである。これは、従来言われてきた指示詞の用法内で説明することができる。

一方、聞き手の作業としては、話し手が聞き手を一時的に排除していたとしても、すべての発話を発話と同時に受信してしまうため、「あれ」を後方文脈照応するもののようにうけとる。「あれ」は結果的に「注意喚起」や「時間稼ぎ」という機能を持つようにみえる。

このふたつの立場は、かさなりがたく、同時に存在することはできないように思える。本当にそうだろうか。むしろ、発信者の操作と聞き手の作業とが一致しないこと自体が、会話のような話しことばにおける特徴なのではないか。

書きことばでは時間的制約がなく、推敲などで書き手が読み手の立場にも立てるので、発信者の操作と聞き手の作業が一致するとみなせる。先行研究は、書きことばと同じ手法で会話における「あれ」の機能を一元的にとらえようとしていた。しかし、音声を用いる会話では、結果的に、話しことばでは話し手の操作と聞き手の作業は一致するとは限らないといえる。

日常会話にあっては、話し手には話し手の文法が、聞き手には聞き手の文法があるのである。それを、無理に一方の立場に統一する必要はない。日常会話で起きる言語的事象を解明するには、発信と受信を区別して、双方から分析することが重要なのである。

註

(1) データは、2009年~2012年の間に録音した自然会話を使用した。今回は延べ9時間14分55秒のデータから37例を確認した。できる限り、自然な日常会話を収集するため、会話場面や話題は特に制限しなかった。

(2) 文字化テキスト凡例 (以下の用例についても同じ)

・A、B…：会話の参加者。番号は [用例番号]-[行番号]。同じ行番号の発話は時間的に並行して進行。

・(…)：発話があるが、聞き取り不可の場合。

・(思って)：「思って」と発話しているように聞き取れるが、不明確な場合。

・=：行をまたいで発話が続いている。　・〔笑〕: 笑い声　・〔咳〕:〔咳〕

・〔#〕：息継ぎ以上の間がある。　・？：発話末が上昇調　・！：発話末が強い音調

・先行文脈の情報が必要と考えたものに関しては、先行文脈を【　】内に示した。

(3) 堀口 (1978)、黒田 (1979) 以降「聞き手も知っている」ことは、本質的にはア系指示詞の使用の制限にはならないという見方が増えてきている。ただし、実際に会話で使用する場合には、語用論的な問題として聞

き手の知識に配慮する必要があるとされている。たとえば、金水・田窪(1990)では、「a. 独り言など、聞き手の影響が文脈的に排除されていること」「b. 指し示される要素が現場または経験スペースにおいて話し手・聞き手に共有されていること」「c. その他のある語用論的条件(引用者注:「教示」や「語り」など)を満たすこと」のいずれかであることがア系指示詞の使用条件とされている。

(4) スペースの都合上、引用箇所に発話がない参加者は表示しなかった。以降、同様の場合も、実際の会話参加者とそこの部分では発話がない参加者の人数を示す。

(5) 定延・田窪(1995)による。

(6) 次の例では、無言の時間のあと、ｒとｓがほぼ同時に発話を開始する(二重下線)。

1ｒ：うん影の支配者で　　影の支配者で〔#〕いいですよ

1ｓ：なんか手下を使うっていうの　をーこないだｔさんと〔#〕それでいいですか=

2ｒ：　　そうしよう、もう疲れるからさー〔笑〕

2ｓ：って話を

参考文献

伊佐早敦子(1953)「はなしことば序――不整表現を中心として――」『国語国文』22巻3号

上村隆一(1996)「コーパスによる日本語会話分析――指示詞の使用について」上田功ほか編『言語探究の領域　小泉保博士古稀記念論文集』大学書林

金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』Vol.6 No.4

金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」日本認知学会編『認知科学の発展』Vol.3 講談社

金水敏・田窪行則(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」『指示詞』ひつじ書房

久野かおる(2007)「「あれ」って何？――日本語教育の視点から」『朝日大学留学生別科紀要』4号

久野暲(1973)「コ・ソ・ア」『日本文法研究』大修館書店

黒田成幸(1979)「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』くろしお出版

Kenchu, Ayako(1997) 'The Japanese Demonstrative 'ARE' as Indexing Speaker's Attitude toward Hearer'『日本女子大学紀要　文学部』46号

迫田久美子(1993)「コミュニケーションにおける「あれ」の用法と機能」『日本語教育』80号

定延利之・田窪行則 (1995)「談話における心的操作モニター機構 ── 心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」 ──」『言語研究』108号
藤谷沙稚子 (2004)「コミュニケーションにおける「アレ」の役割 ── 指示対象が明示されない指示詞 ──」『日本語教育論集』(姫路獨協大学大学院) 13号
堀口和吉 (1978)「指示語の表現性」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学) 8号
三上章 (1970)「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版
山根智恵 (2002) 日本語研究叢書15『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版